



# ICN大会に参加して

国立国際医療研究センター国際医療協力局

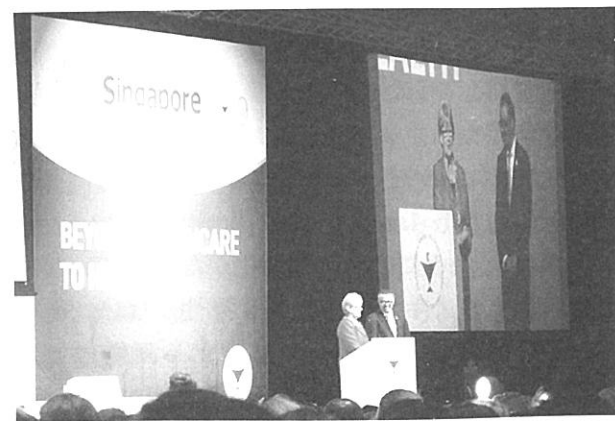
人材開発部研修課／看護師 深谷 果林

「みなさん！数日前に日本で行われたG20。首脳陣の大多数が男性です！残りの女性はどこにいますでしょうか？そう、この会場にいるのです！」。国際看護師協会会長Ms.Annette Kennedyの熱いスピーチで幕を開けたICN大会(International Council of Nurses/ICN)は、“Beyond Healthcare to Health (保健医療ケアを越えて健康に)”をテーマに、2019年6月27日～7月1日までシンガポールで開催されました。

ICNは、2019年6月現在、132の国や地域の看護師協会(national nurses' association / NNAs)からなる組織で、1899年(明治32年)、イギリスのフェンウィック夫人により、看護婦の社会的地位の向上と国際連帯を目的として設立されました。その頃、日本の看護の動きとして、産婆規則と産婆試験規則の公布がありました。また、日本で最初にナイチンゲール方式看護教育を受けた看護婦の一人、大関おおせき(1858-1932)により、在宅看護を担う看護婦のための「看護婦派出心得」が刊行されました。ICN設立の経緯は、1848年、米国で起きた女性の教育、労働、専門職業、政治等における諸権利の平等に対する要求に遡ります。そして40年後の1899年6月、「看護婦の問題は、婦人の問題である」と主張するフェンウィック夫人が、ロンドンで開催された国際保健婦人会議で開いた「看護婦部会」が発端です。

主となる議題には、フェンウィック夫人が説いていた、教育や試験と同様、看護婦の水準向上に必要な「看護婦の登録」だったそうです。当時79歳だったナイチンゲールは、この「看護婦の登録」に賛同していなかったといわれています。しかしながら、大会にはフェンウィック夫人らの活動に敬意を表すメッセージを送り、大会に花を添えたとされています。

現在のICN大会は、2年毎に開催される会員協会代表者会議に合わせて、世界各国の看護師が集まります。ICN設立120年となる今大会では、約90か国から約5,000人の参加があり、セッションやポスター発表等を通して、看護師の教育、労働環境、離職の問題、そして国家間移動における課題などに関する意見交換や協議が行われました。なかでも、看護師の国家間移動における課題として、“Cultural Competency”という言葉が多く聞かれました。いま世界では、看護基礎教育を受けた国とは異なる国で、看護師として働く看護師たちの活躍があります。特にEU(European Union, 欧州連合)や、ASEAN (Association of Southeast Asian Nations, 東南アジア諸国連合)では、国家間移動のための教育制度やガイドラインが整備されています。しかしそこには、頭脳流出や労働条件の課題があると共に、“Cultural Competency”の課題が挙げられています。“Cultural Competency”を異文化適応能力とすると、そこには文化的側面のみならず、倫理



左：国際看護師協会会長 Ms.Annette Kennedy

右：世界保健機関(WHO)事務局長 Dr.Tedros Adhanom

面、感情面への配慮ができる能力も重要であるとされていました。国家間移動で、看護職が活躍する場面が多い諸外国では、この“Cultural Competency”が看護師の能力として重要視されており、その能力を養うための看護基礎教育カリキュラムや教育方法を検討している国もありました。国によって、看護の概念や業務範疇は少しずつ異なるものの、世界の保健医療従事者の半数が看護職であること、看護職の国家間移動があること、そして何より人の移動が活発となっていることから、国を問わず、専門職として求められる喫緊の課題なのかもしれません。

来年、日本はオリンピックを迎えます。数多くの国・地域から訪れる旅行者の医療機関受診数は、今よりも増加することが予想されます。国内にいながら、“Cultural Competency”を育みつつ、日本の看護を世界に発信できる貴重な機会といえるかもしれません。

さらに2020年は、世界保健機関(WHO)で定められた看護師・助産師年。そしてナイチンゲール生誕200年です。記念すべき年ということで、ICNはWHOと連携し2018年から2020年にかけて“Nursing Now”キャンペーンを実施しています。なかでも、“NIGHTINGALE CHALLENGE”という取り組みでは、世界の少なくとも20,000人の35歳以下の若手看護師が、将来、リーダーシップをとり、プラクティショナーとして、そしてアドボケーターとして活躍できるよう、多国間・多組織間において、教育カリキュラムや人材交流プログラムの構築が進められています。今大会でも、フロントラインの看護師(臨床現場等で患者に直接的ケアを担う看護師)も政策提言ができるようリーダーシップが重要となってくる、と議論されていました。時代は変わっ



ナイチンゲールのリーダーシップについて語る演者



曲『YMCA』に合わせて踊る世界各国の看護師たち

ても、常に変化し続け、チャレンジし続ける精神は、先人たちに通ずるものがあると感じます。最終日のクロージングで、曲に合わせて踊る看護師たちの姿からは、力強さと柔軟さ、そして団結力を感じました。この力は、様々な看護経験から培われた産物なのかもしれません。

今回、この大会に参加して、日本国内では出会うことのできない多くの看護職と出会い、看護について語り、そして看護界の潮流を知ることができました。今後の仕事に役立てていきたいと思えます。

### 参考・引用文献：

- 日本看護歴史学会編『日本の看護のあゆみ 歴史をつくるあなたへ』日本看護協会出版会
- デジー・カロリン・ブリッジズ著 小林富美栄・久保庭和子訳『ICNの歴史 1899-1964』
- 公益社団法人日本看護協会ホームページ<https://www.nurse.or.jp/nursing/international/icn/about/overview/index.html> (2019年8月7日アクセス)



会場近くのマーライオン像